

適性検査1

注 意

- 1 検査開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 2 検査時間は四十五分間で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 問題は

一

 問1 から

一

 問4 まであります。
- 4 問題用紙は1ページから8ページまであります。
- 5 検査開始の指示後、すぐにページがそろっているかを確認^{かくにん}しなさい。
- 6 解答用紙は二枚^{まい}あります。
- 7 受検番号をそれぞれの解答用紙の決められた場所に記入しなさい。
- 8 解答はすべて解答用紙に記入し、解答用紙のみ二枚とも提出しなさい。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（＊印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。）

眠人、竜征、さくら子の三人は、ある先生のお別れ会のためにそれぞれの楽器で合奏をすることになった。しかし、さくら子は人前に立つと緊張し、演奏し続けることができなかった。次の文章は、三人が公園で練習しているところに、いつも公園で話しかけてくるおじいさん（拝島）が犬を連れてきた場面である。

トトトンと竜征が出し抜けに太鼓を叩く。するとソロが狼のような大きくて三角の耳をさらにぴんと立てた。

「お、反応したぞ」

竜征が面白がってもう一度叩く。いたずら心を起こしたようだ。続いて眠人も三線を奏でてみた。今度はうららのほうがぼんやりとした顔つきのまま反応した。

「君たち、せっかくだからおれらの演奏を聞いていけよ」

ソロとうららに竜征が笑いかける。またおかしなことを言い出しやがって、と眠人は顔をしかめた。けれども拝島がその話に乗った。ソロとうららにお座りをさせ、飼い主たちをべ

ンチに座らせた。

「竜征君、太鼓の音が大きいとびっくりしちゃうから控えめにね」

拝島の注文に竜征は「ラジャー」と元気に応える。それからやさしく太鼓を叩いてみせた。これぐらいならいいでしょう、と。「ほら、さくら子ちゃんも」と拝島にうながされ、さくら子も三味線を手に取った。

音はおとなしめ。テンポはゆっくり。犬たちの反応を窺いながら『じんじん』を演奏した。眠人が歌ったら、ソロもうららも目を丸くしたり首をかしげたりしながら聞いている。その様子が微笑ましくて、笑いそうになりながらなんとか演奏を終えた。飼い主たちも面白がってくれて、そろって眠人たちに礼を述べた。

「あんまり緊張しなかったみたいだな」

竜征がさくら子に向かって言う。さくら子はきよとしたあと、不思議そうな顔をして答えた。

「あ、そ、そうかも。ソロ君とうららちゃんがかわいくて、そつちばかりに気を取られてたから」

その言葉を耳にした拝島の目が光ったように見えた。

「なるほど、さくら子ちゃんはわんこが客なら緊張しないの

か」

「あはは、そうかもしれないです。^{*そう}箏の演奏会もお客さんが全部犬だったら緊張しないのにな」

「なるほど。だったらいろいろ連れてきてあげよう。おれはわんこの友達がたくさんいるからさ」

その日以降、^{いこう}拝島は犬とその飼い主を、公園へ連れてくるようになった。犬の友達が多いと言っていたけれど、実際にたくさん犬を連れてやってきた。平日の夕方でも土日の昼でも、次から次へと新たな犬を連れてきた。

パピヨンのような小型犬もいれば、バーニーズ・マウンテン・ドッグのような超^{ちよう}大型犬^{おおがたけん}もいた。いかにも^{りようけん}獵犬^{りようけん}といったいかつい顔つきの子もいれば、かわいらしい雑種の子もいた。統一性はない。とにかく多くの犬が来た。二週間で三十頭近くやってきただろうか。拝島によればまだまだ連れてこられるという。

さくら子は新たな犬がやってくるたびに大喜びだった。小さい子は抱^だきしめ、大きい子には抱きつき、触^ふれ合^あいを存^{ぞん}分に^{ぶん}楽しんだ。拝島はやってきた犬たちが眠人たちの演奏を聞く絵を描^かいては、飼^かい主^{しゅ}たちに渡^{わた}していた。ただ、描かれる犬は連れてこられた犬たちよりもなぜかいつも一頭多くて、眠人が観察

してみたところ白い和犬が交ざっていた。

「いつも描かれてる白い犬、どこかで見たことがあるんだけど」

奇妙^{きみょう}なことをさくら子が言う。拝島に尋^{たず}ねてみたところ、それがかつて沖繩でレスキューしたという犬だった。拝島が悲しげな表情を浮^うかべたので、それ以上詳^{くわ}しく質問できなかった。もうこの世界にいない子であることは容易に想像できた。

拝島が犬を連れてきて、眠人たち三人が演奏を聞かせる。なんだかんだ言^いって、さくら子が緊張に慣れるのにこの方法が一番のようだった。さくら子は犬に聞かせるつもりで三味線を弾^ひく。とはいえ飼^かい主^{しゅ}たち人間も聞いているわけで、結果的にたくさん^{*}の場数^{ばんすう}を踏^ふむこととなった。

そうしたある日のことだ。ゴールデン・レトリバー^{*}を連れて家族が招かれてやってきて、眠人たちの演奏を聞いた。家族には小学校三年生の女の子がいた。その子は熱心に演奏を聞き、そしてさくら子に言ったのだ。

「三味線かつこいいです。わたしもお姉^{ねえ}ちゃんみたいに、三味線を弾けるようになりたいです」

さくら子の目に涙^{なみだ}が浮^うかんでいた。憧^{あこが}れてくれる人がいる。

そうした喜びに心を打たれての涙のようだった。いままで彼女
の涙は何度も見てきた。でもまったく違う涙に見えた。

不思議なことに涙を流したその日以降、さくら子の演奏は安
定していった。犬連れではない客が東屋の外で聞いていても、
動揺せずに演奏できるようになった。急にまた緊張するように
なったら困るので、さくら子の変化はあえて話題にしないよう
に努めた。それは竜征も同じつもりのように、気づいているけ
れども「ア　ア　」。

拝島も変化に気づいたようだ。眠人とふたりきりのときに、
のんびりとした口調で言ってきた。

「さくら子ちゃん、緊張しなくなったなあ。憧れられて自信が
芽生えたのかもなあ。もしくは憧れられたからには、かっこい
い姿を見せなくちゃって頑張ってるのかもなあ」

さくら子の緊張対策が解決に向かったことで、練習は演奏の
完成度を上げることに集中できるようになった。日に日に曲が
いいものに仕上がっていく手応えがあり、練習後は晴れ晴れと
した気持ちでダム湖の堤防の上に延びる遊歩道を歩いた。

(関口尚『虹の音色が聞こえたら』問題のため一部改編)

〔注〕

- *太鼓：打楽器の一種。文章中では竜征が担当する。
- *ソロ：拝島が連れてきた大型犬の名前。
- *三線：弦楽器の一種。文章中では眠人が担当する。
- *うらら：ソロと同様、拝島が連れてきた大型犬の名前。
- *三味線：弦楽器の一種。文章中ではさくら子が担当する。
- *じんじん：曲の名前。
- *わんこ：犬のこと。
- *箏：弦楽器の一種。
- *場数を踏む：多くの経験を積んで慣れること。
- *東屋：主に四方の柱と屋根だけの小屋のこと。

問1

① おかしなことを言い出しやがって、と眠人は顔をしかめた。とありますが、眠人が「顔をしかめた」理由を解答らんに合うように書きなさい。

問2

② 目が光ったように とありますが、「目が光ったよう」とは、この場面ではどのようなことを表現しているのか解答らんに合うように書きなさい。

問3

本文中の空らん【ア】に入ると考えられる内容を、解答らんに合うように十五字以上二十字以内で書きなさい。ただし、「さくら子」という言葉を用いること。

問4

自信が芽生えた とありますが、これまでのあなたの経験の中で、あることがきっかけで自信をもてるようになったことは何ですか。そのきっかけを明らかにしながら、次の条件にしたがって具体的に書きなさい。

条件1 書き出しは一まずめから書き始めなさい。

条件2 文章は、六十字以上七十字以内で書きなさい。

、や。や「なども一字と数えます。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（＊印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。）

＊
パスカルが宇宙の果てについて論じた、知らない世界を本当に想像することができるとか、という問題がある。われわれは未知とか未来とか言ってるものを想像するが、実はそれは既知の延長で想像しているだけで、本当に知らない世界は想像できないはず。なぜなら、想像するにも手がかりがない。

宇宙の果てが何なのかって考えるのと同じで、手がかりがないから考えようもない。われわれは今、未来のことを論じるとすると、今のさまざまな徴候から論じている。さまざまな今の徴候から論じる未来が本当の未来なのか？ 本当に新しいことは、徴候すら見せていないのではないか。

人間は本当に宇宙の果てを想像できないかと言うと、私はそうじゃないと思う。過去を見て、「懐かしさ」を感じた時に、例えば田舎に帰ってふと私は畑とか石垣に何かを感じる時がある。石垣にハツと思う時がある。その時に、「懐かしい」という感覚と共に何か未知なものがある。

＊
文学者の杉本秀太郎が京都の街を歩いている時、路地を見て、昔の同級生の家をふっと思い出したことがあると書いている。

同級生の家ではないのに同級生がそこにいると思うと同時に、ヘンな未知が見える。アア鋭い感性だなと思った。「懐かしさ」とは、過去の横にふと感じることができる「未知」なのかもしれない。それでホーッと思っ、「懐かしさ」というのは不思議な感覚だとますます興味を覚えた。

建物とか街というものは、人間が生きていくうえでなぜ必要かということ考えた。もちろん、実用的なことは別にして。

「懐かしさ」を生む条件というのは、あまり変化しないことなんだと思う。日常的なことでは、大きなものほど変らない。一番は自然の地形である。その象徴が富士山^①。人間が作ったものの中では、建築や都市が最も変らない。

考える手がかりとして一番分りやすいのは、毎日家から駅まで通う通勤通学中の風景。大抵つまらない建物だが、それが突然なくなつて駐車場なんかになっている時がある。あの時の喪失感。あの喪失感は、ほかに例えようのない不思議な感覚だと思う。なんて言うんだろう。ほんのちよつとした感覚なんだが、深いようでもあり、すごく微妙な感覚で、そこが思考をそそる。

人は建築や都市を毎日見ているが、無意識のうちに何かを確認しているのではないだろうか、と思う。建物や街を見た時に、

昨日や去年やその前に同じものを見たを確認している。

例えば、子供の時に訪れた家を久しぶりに見たとする。すごく懐かしと思う。

10年前に見た家がまだ残っていたりすると、10年前のことを――ア――自分に気づく。自分は10年前から今まで――イ――ということが分かる。自分は10年間――ウ――ずっと自分は自分だったんだということが分かる。その時、湧いてくるのが「懐かしさ」という謎の感覚ではないか。

自分の連続性の確認というのは、実は毎日やっていて、それが欠けると自分の連続した一部が欠けてしまうように不安になる。人間が「なぜ、私は私なのか」ということを、^②建築や都市が変らないことで確認している可能性があるのではないか。

(藤森照信『建築とは何か 藤森照信の言葉』問題のため一部
改編)

〔注〕

* パスカル：フランスの思想家、数学者、物理学者。

* 既知：すでに知っていること。

* 徴候：何かが起こる前ぶれ。

* 杉本秀太郎：フランス文学者。

問1

富士山^①

とありますが、富士山は何の具体例として挙げられていますか。それを説明した次の文の「あ」「い」にあてはまる適切な言葉を本文から抜き出し書きなさい。ただし、「あ」は二字、「い」は四字で書くこと。

富士山は「あ」の中で「い」ものの具体例として挙げられている。

問2

本文中の空らん「ア」、「イ」、「ウ」にあてはまる言葉を次の語群から一つずつ選びなさい。

語群「連続している 記憶^{きおく}している 生きてきた」

問3

建築^②

や都市が変らないこと とありますが、九段中等教育学校に入学して充実^{じゅうじつ}した生活を送るうえで、「変わること」、「変わらないこと」のどちらが重要であるとあなたは考えますか。あなたの考えとその理由を書きなさい。その際、次の条件にしたがいなさい。

条件1 段落構成^{だんらく}については、次の①から③の条件にしたがうこと。

こと。

① 第一段落には、あなたが九段中等教育学校に入学して充実した生活を送るうえで、何が「変わること」が重要であるか、または、何が「変わらないこと」が重要であるか、どちらか一方について、考えを書きなさい。

② 第二段落には、第一段落で書いたあなたの考えの具体的な理由を、あなたの経験をもとにして書きなさい。

③ 第三段落には、第一、二段落をふまえて、九段中等教育学校入学後のあなたの生活が、どのように充実するかを書きなさい。

条件2 そのほかについては、次の①から③の条件にしたがうこと。

① 解答は原稿用紙げんこうの正しい使い方で書き、書き出しは1
ます空けて書き始めなさい。

② また、言葉を正しく使い、文章は百八十字以上二百二
十字以内で書きなさい。

③ 、や。や「なども一字と数え、改行などで空いた
ますも字数に数えます。

